

はじめに

現在進行形でコンスタンティヌス帝の1700年目が経過中ということもあって、彼関連の研究は西欧で破竹の勢いで進展している。本稿では、都市景観史学的視点から、帝都ローマにおけるコンスタンティヌス帝（以下、コ帝と略称）の支配理念の「へそ」というべき決定的地点にかかわる新説を紹介し、新たな視点から記念建造物建設による支配者のプロパガンダを探ることによって、コ帝像に再検討を加えつつ、記念建造物の読み取り方の手ほどきとする。その際、以下の諸点が検討の主眼となる（なお、本稿での典拠引用は必要最小限に留めた）。

① 結果的に、残存文献史料、とりわけエウセビオス『教会史』と『コンスタンティヌスの生涯』の叙述内容は、多少の混乱と意図的思惑による潤色はあるものの、知りえた情報自体についてはおおむね誠実に記していることが確認されるであろう。正しい読解が求められる所以である。

② なぜコ帝はあの場所にいわゆる凱旋門（以下、「アーチ門」と表記）を建てたのか。この問題を斬新な新説の紹介によって(1)、かの時代において凱旋通りからアーチ門を眺望すると、延長線上に浮かび上がってくるのは、当時コロッセオ横に屹立していた巨像 colossus は不敗太陽神 Sol Invictus であり、それを前提にすればアーチ門の屋階 attic 南北両面の掲載銘板でこれまで論争の的だった「神格の導きで」の「神格」とは、不敗太陽神以外の選択肢はないことが確認される。

③ これとは別に、いわゆる「マクセンティウス起工、コ帝完成ないし奪取のバシリカ」（以下、「新バシリカ」）内に鎮座していた巨像（現在コンセルヴァトール博物館中庭に断片展示）の、あの特徴的な凝視の先もコロッセオそばの巨像だった、と判明した(2)。

④ 以上から、少なくともこの時期におけるコ帝の帝都ローマにおける支配プロパガンダの核心はあくまで「不敗太陽神」にあり、この時期の彼の「キリスト教」改宗説は、教会にとって都合のよい強引な主張、ないし後知恵にすぎなかったことが明確になる。景観史学的観点を導入することで文書史料の信憑性と同時に傾向性もあぶり出すことができた、わけである。

ローマへの旅行者が必ず訪れる場所、それはおそらくコロッセオ（正式名称「フラウィウス円形闘技場」）だろう。そしてお決まりの記念写真を撮る。だがあまりに巨大で(高さ48m)、そのうえ太陽光線のあんばいを気にして思わず知らず後ずさりし、コ帝のアーチ門の東側手前あたりでシャッターを切ることになる、はず。そして今度は逆方向のアーチ門（高さ21m）を見上げ、これもまあ計ったように、その南面前で写真を撮る。というのも、太陽光は一日中これら闘技場やアーチ門の南面に注がれていて、写真写りがいいからで、実際、そういう写真がこれまで何億枚も撮られてきたことだろう。



Google Earthによるアーチ門・円形闘技場付近：2014/12/30

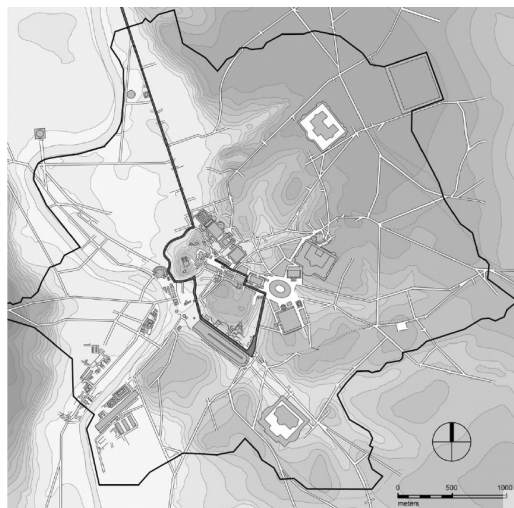
だが、円形闘技場の西側の高台に見える遺跡（ハドリアヌス帝創建「女神ウェヌスと女神ローマの神殿」）や、逆方向の地下に掘られた一面の半楕円構造の遺跡（ドミティアヌス帝創建「剣闘士大養成所」）に注目し、そこに行ってみる観光客はまれだろうし、いわんや前者と円形闘技場の間の広場の北端の、4本の樹木がこんもり茂った方形台座に気づく人などおよそ皆無だろう。すっかり観光客のベンチと化しているその台座こそ、実は今回の主役なのだが、この多くの観光客がさんざめき、土産物屋やローマ兵の扮装の客引きが跋扈する区画は、古代ローマ時代、とりわけコ帝時代においても都市景観上きわめて重要かつ象徴的な場所であった(3)。



北側からアーチ門方面を見る：手前右の方形区画が旧巨像の台座跡

アーチ門前で写真を撮る観光客が背にする自動車道、すなわち現在、アーチ門手前で交通止めになって南に延びている道は、今日「サン・グレゴリオ通り」Via di San Gregorio と名付けられている。これはかつて「凱旋通り」Via Triumphalis と呼び習わされた目抜き通りだった。実際、凱旋将軍が凱進行進する順路の最終段階がここを通ってもいた（のみならず、それに匹敵する各種祝賀行列〔入城式 *adventus* や 行進 *profectio*〕も同様の道順だったらしい）。古来、凱旋軍は城壁外のマルスの野に集結し、凱旋将軍は四頭立二輪戦車（クワドリガ）に搭乗して出発する。そこからの道筋は諸説あるようだ。ひとつはそのままマルスの野を東に移動する説、もう一つは「フラミニウス街道」Via Flaminia を通る説である（その際、「凱旋門」Porta Triumphalis をどこに想定

するかが分岐点となる)。いうまでもなく、凱旋式行進は誰が権力者かを市民たちに視覚的に顯示するまたとない機会だった (4)。



図版 1 326年のコンスタンティヌス登位20周年記念行進の順路

ところが現代観光客の認識と異なって、L'Orange (1939年) (5) がすでに喝破していたことだが、このアーチ門の主体は北面だった。その証拠に彼が挙げるのは、第一に、本来ハドリアヌス帝だった頭部が取り替えられ、背景に光輪が刻まれたのはいずれも北面の4円形浮彫であり、またアーチ門の東西壁面上部にそれぞれ掲げられた太陽神と月神も、北面から見たときまさしく、東から西への天体の動きに合致しているからだった。

1. 文書史料の精査と周辺事情

私は本稿で、文書史料と考古学的知見のすりあわせにより、博覧強記を地でいく保坂高殿氏の最近の研究 (6) の結論とはまったく逆に、結果的にエウセビオスの『教会史』と『コンスタンティヌスの生涯』叙述の大筋での史的妥当性を再確認することとなった。まずは関連のエウセビオス史料を簡単におさらいしておこう。

紀元後312年秋、コ帝は帝国西部の内乱状況を終息させ、帝都ローマに入城し、自己政権確立のため諸策を講じた。教会史家エウセビオスは、それを記念建造物がらみで、次のように述べる。

a. 『教会史』IX. ix. 10-11 (秦剛平訳, 講談社学術文庫, 2010年: 一部修正): 315年頃著作

10. . . . (ローマの人びとは歓呼して彼を迎えたが、彼は慢心することはなかった。それは)、彼には神の助けがあったことがよく分かっていたからである。そこで彼はただちに、自分の像の手に、救い主の受難の記念物をもたせるように命じた。そして、右手に救い主のしるしをもった彼の像がローマの中心地に建つと、彼は命じて以下の碑文をラテン語で刻ませた。

11. 予は、勇気の真の証しであるこの有益なしるしによって、
諸君の都を暴君の軛から救って解放した。さらに、予は元老院

とローマ市民を自由にし、往時の名声と光輝を取りもどした。

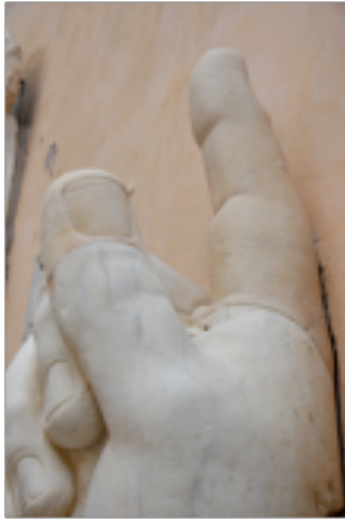
注目してほしいのは、ここではコ帝の「像」が叙述の中心になっていること、また邦訳だとわかりにくいのが、その「像」関係（「自分の像」「手」「受難の記念物」「右手」「救い主のしるし」「彼の像」「ローマの中心地」「碑文」）がすべて単数で表現されていることである。そこから、エウセビオスがここで言及している「像」はある特定の彫像を指しているのであって、支配者像として公私を問わず至る所に設置された皇帝彫像への一般的表現ではない、と断定していい（比較せよ、『生涯』IV. xv. 2-xvi；肖像画については、cf., III. iii；IV. lxxii）。

ただ、そもそも帝国東部が活動の場だったエウセビオスが帝都ローマを訪問したという証言は皆無なので、この箇所と言及が第三者からえた伝聞情報を基にしているのは明白。であれば、直接の見聞以上に意図せず事実誤認が紛れ込む可能性は高い。すなわち、書簡や聞き取りの際に、情報提供者が立像とは別に銘文について言及したのを、書き手が勝手に結びつけて理解した可能性もある。否そうに違いない。というのは、帝都において「立像」と「碑文」に該当する単独で著名な記念物は容易に想定可能だからである。私見の結論を先取りするなら、帝都ローマでコ帝の彫像としてもっとも有力な第一候補は、フォロ・ロマーノの新バシリカ内の西アプシスに安置されていた巨像、というよりも、現在カンピドリオ丘のカピトリーニ博物館のコンセルヴァトリー宮殿の入口すぐの露天の中庭に置かれている巨像の断片群といったほうが、読者諸氏にわかりやすいかもしれないが、あれ以外にない。場所がフォロ・ロマーノであれば「ローマの中心地」という表現にまさしく合致している。

『教会史』叙述で注目すべきは、彼がその像の立ち姿を具体的に①「右手に」、②「救い主の受難の記念物をも」ち、③「碑文がラテン語で刻」まれていた、としていることである。コンセルヴァトリー宮殿中庭の諸断片ははたしてそれに該当するであろうか。一見すると「否」である。なぜなら、確かに中庭には右手がそれも2つ保存されているが（以下、断片群中のそれを1、中庭反対側のやや小ぶりのそれを2とする：なお、2つの右手問題についてはある学会で2012年に発表したもので、ここでは詳しく触れない）、そもそも指の形が物を握っているようにはなっていないし、②も見受けられない。また、③の片鱗すら残っていないからである。

しかし手の問題は意外な形で決着する。2011年の夏、筆者はかの場所を訪れて、保存されている右手2点をこれまでになく子細に観察し、以下の意外な事実を確認した。

- (1) いずれも人差し指を立ててあたかも演説のポーズを示しているが、その人差し指と親指先端部分の石材材質が他と明らかに違っており、発見後の補修であることが明白。要するに、指を立てて復元する必然性はなかった。論より証拠、21世紀での復元図ではすべて握りとなっている(7)。



右手1



右手2

いずれも親指と人差し指の素材や色の違いに注目



図版2

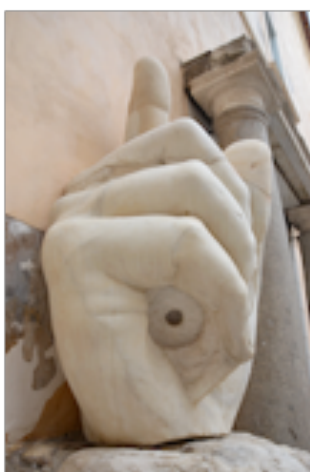


図版3 斜線部分が残存断片部分を表示
(左下の人物像との比較も注目のこと)

(2) 他の指3本は握りこぶしの形体をとっているが、上下からそのこぶしの中を覗いてみると、右手1は握りの上下にそれぞれほぞ穴があり、右手2には上部のみという違いが確認された(8)。すなわち、右手1の場合は外見上、握りこぶしを上下に貫通して槍とか杖のような長い棒状のものが握られていた姿をとっていたが、右手2では握りの上部に何物かを掲げていたことになる。



右手1こぶしの上の四角のほぞ穴



右手1下の丸いほぞ穴



右手2上のほぞ穴



右手2こぶしの下側

(3) その上、近年の Pensabene ら (2002年) による大理石の安定同位元素分析⁽⁹⁾によって以下が判明した。右手1の石材のみカララ産を示したが、ちょっと小ぶりな右手2は他の断片群と同一のパロス島産であった。ということは、右手2と他の諸断片は先行する彫像の一部だったが、コ帝像に彫り直されたとき、新たに右手1と取り替えられたと推定できる。

まとめると、かの巨像は、ローマではすでに貴重となっていたパロス島産を使って、おそらくそれ以前のいずれかの皇帝（ひょっとするとマクセンティウス帝）の巨像として製作されていたが、それがコ帝像に刻み直された。ただ右手は独自の何事かを示すべく他の石材と取り替えられた。これで①と②はほぼ解決するはずである。

③については、次のもうひとつのエウセビオス史料を検討して改めて言及するが、『教会史』の叙述ぶりでは、その銘文は像の台座部分にでも刻まれている印象であることを指摘しておこう。

- b. 『コンスタンティヌスの生涯』 I. xl. 1-xli. 1 (秦訳；京都大学学術出版会, 2004年；一部付加修正)：337年後半以降著作；336年のエウセビオス『コンスタンティヌス帝就任30周年記念演説』 ix. 8にほぼ同文あり

40. 1. 彼は、すべての人びとに、刻まれた大きな文字で救い主のしるしを告知されました。そのさい彼は、それを敵に打ち勝った勝利の大きなトロパイオンとして帝都の中央に建てられました。そして以下〔の碑文〕をローマの統治の救済的なしるしとして、また帝国全土の護符として、消えることなき文字ではっきりと刻まれたのです。2. ついで彼は、時を置かずに、ご自身の姿を表わした像の〔右〕手に十字架を置いた高い塔〔ないし、長い棒〕をローマの繁華街に建て、以下の碑文をラテン語で一字違わず刻むように命じられました。

予は、勇気の真の証しであるこの有益なしるしによって、汝らの都を暴君の頸木から救って解放した。さらに、予は元老院とローマ市民を自由にし、往時の名声と光輝を取り戻した。

41. 1. 神に愛された皇帝は、ときにはこうした仕方でも、勝利をもたらす十字架を誇らしげに告白しつつ、ほかならぬローマ人に神の子を大胆に告知されたのです。

内容はほぼ『教会史』と大同小異とはいえ、テーマは逆転し、まず「大きな文字」（＝大文字）での「しるし」として帝都の中心に建てられた「大きなトロパイオン」 μέγα τρόπαιον に触れ、その後「十字架」を持った「像」を置いた「高い塔」ないし「長い棒」に言及しているが、力点は「像」よりもむしろ刻まれた文字がらみのほうに移っている印象がある。

「トロパイオン」とは、ギリシア時代以降、戦闘での勝利者が戦場に打ち立てた一種の戦勝記念碑で、ローマ時代にはコインや浮彫で煩瑣に目にすることができた。まず棒杭を十字に結び合わせ（ユスティノス『第一弁明』55）、それに敗者から剥ぎ取った兜・鎧・盾や武器を装着した。しばしばその両脇に捕虜が描かれ、皇帝が肩に背負っている場合もある（図版4のコイン裏面もその表示あり）。



Palazzo Massimo所蔵Portonacci石棺



Gallienus, 257/8年Köln打刻Antoninianus銀貨

また勝利の象徴として抽象的に使用される場合もある。その代表例はエウセビオス『教会史』II. xxv. 7に引用された3世紀初めのローマの教会著述家ガイウスの言であろう。「私は使徒らのトロパイア〔複数形〕を示すことができる。もしあなたがバチカンかオステティア街道を行けば、この教会を建てた者たち〔ペトロとパウロ〕のトロパイアを見るだろう」。実際にサン・ピエトロ大聖堂教皇専用高祭壇の地下から発掘されたのは、ペトロの遺骸を納めた質素な祠にすぎなかった（参照、ピエトロ・ザンデル『バチカン サン・ピエトロ大聖堂下のネクロポリス』ぎょうせい、2011、124-127）。

さて、エウセビオス言及のコ帝が刻ませた銘文には、実は興味深い平行史料が二点ある。聡明な読者諸氏はもうお気づきだろう。ひとつは、コ帝のアーチ門屋階 attic 上に掲げられた南北両面中央部のあの著名な銘板である。

インペラートル [最高軍司令官] ・カエサル [皇帝] ・フラウィウス・コンスタンティヌス・最高に敬虔で幸運なるアウグストゥス [正帝] に、ローマ元老院とローマ市民は、[彼が] 神格の導きで *instinctu divinitatis* , 卓越した武徳により、彼自身の軍と共に、暴君と彼の党派のいずれからも、国家を一斉に正しき武力で自由にしたので *de tyranno quam de omni eius factione ... rempublicam ultus est armis*, 諸凱旋 [のレリーフ] で飾られたアーチ [門] を奉献した *arcvm trivmphis insignem dicavit*.

これまで、コ帝のそれが厳密に「凱旋門」*arcus Triumphalis* といえるかどうか、深く追求せず結論を先取りして「アーチ門」と表記してきた。なぜなら本来「凱旋門」とは、軍事命令権を保有する政務官が対外戦争に勝利し凱旋将軍として凱旋式を挙行するとき、それを記念して作られた単独の「アーチ」*arcus* 構造の、「門」*porta* を指す。この定義に照らすなら、コ帝のそれは埒外となる。なにしろ銘板自身が、コ帝が「暴君と彼の党派」からローマを解放したので、それを記念してローマ「元老院とローマ市民」がこの門を奉献した、と語っているのだから。すなわち、コ帝の勝利は、外敵ではなく国内の内乱平定によるものだった。ここで名指しされていない単数の「暴君」とはマクセンティウス、すなわちイタリアとアフリカを勢力下に収めたいわけの「篡奪皇帝」を指す。だから単なる「アーチ門」にすぎないという理屈も一応可能になる。だが、城壁や建造物に開けられた普通の「門」ではないという一点で、限りなく「凱旋門」的特徴を有していることも明らかで、しかし欧米では「凱旋」にこだわらず、簡明に「コ帝のアーチ」 [*arcus Constantini* (羅) / *arco di Costantino* (伊) / *arch of Constantine* (英)] と表現されるのが通例である。「凱旋門」にこだわるのは、「五賢帝」同様、漢語的な重厚さが好まれる我が国独特のガラパゴス的表記なのかもしれない。

ここで次に注目したいのは、末尾の「諸凱旋で飾られたアーチ」という表現である。この文言、先行研究で読み流されてきた印象が強いが、「諸凱旋」と複数形で表現されていることをもっと重視すべきだろう。換言するなら、世の美術史家たちによって「略奪/剥ぎ取り」*spolia* と若干軽蔑を込めて表現されてきた本アーチ門を飾る諸レリーフの再利用を、施主のコ帝なり元老院が十分自覚して意図的に行ったと明言しているわけである。周知のように、屋階の南北8枚の矩形レリーフがマルクス・アウレリウス帝、脇通路上部の南北8枚の円形レリーフがハドリアヌス帝、屋階の東西2枚の矩形レリーフと南北8体のダキア人捕虜像がトラヤヌス帝の、各々「凱旋」を記念した建造物から持ち込まれたものだった。

ここで、「スポリア」の内実にも触れておこう。巷に流布している通説は、経費節減と建築期間短縮のため文字通り既設建造物から剥ぎ取ってきた、と理解されている。しかし、この時代になると帝国東部の良質の大理石入手が困難になったという事情があるらしいし、度重なる火災によって廃墟となった建造物から回収され、マルスの野の専用倉庫に集積されていたものが、修復の上で再利用された証拠もある。まさにマクセンティウス治下の307年に「ウェヌスとローマ神殿」が火災にあっているもので、一定の説得力があるように筆者には思えるのだがどうだろう。

次に、『教会史』と『生涯』の検討に移る。皇帝称号の後の本文での違いは、ギリシア語（エウセビオス）とラテン語（アーチ門）で、人称が一人称（エウセビオス）か三人称（アーチ門）くらいで、驚くほど類似の単語が確認される。いわく、コ帝は「国家/都」を、そして「ローマ元老院と民衆」を「暴君」とその党派から「解放した」。相違は、ラテン語が「神格の導きで、卓越した武徳により」としている箇所を、ギリシア語はキリスト教的視点で「勇気の真の証しであるこの有益なしるしによって」と十字架をほのめかして読み替えている点のみといってよい。

こう考えるなら、313-315年に、文字通り帝都の目抜き通りに、抜きんでて高く建設されたアーチ門の屋階に麗々しく大文字のラテン語で刻まれた記念銘板ほど、エウセビオス情報にふさわしい舞台はない。ただしエウセビオス叙述で検討すべき課題は少なくとも2つ残っている。ひとつは、『教会史』から『生涯』へのテーマの微妙な変化をどう考えるか、第二は、エウセビオスが我らに意図的に示めそうとしている「十字架」を整合的にどう解釈するかである。

仮説として、『教会史』段階でエウセビオスはコ帝の巨像とアーチ門の本来別々の2情報を混同して1つと受け取り合体的な叙述となったが、20年を経て多少正確な情報をえて『生涯』を書いた可能性がある。『生涯』叙述は、3つの話題に分かれている。①まずアーチ門を「勝利のトロパイオン」として建設したこと、②次いでコ帝が「時を置かずに」キリスト教的「しるし」を手にした自己の彫像を建て、そして③なぜか前にもどって（アーチ門上の）銘文があたかも、彫像台座あたりに刻まれているかのように表現している。事実は、周知のごとく、③は①に付属していて、②にではない（但しこの件、後日別仮説を提示予定）。

ここで手短かに、巨像の「しるし」について触れておこう。『教会史』にしる『生涯』にしる、コ帝は片手（右手）に十字架のしるしをもっていたとしている。最近のコンセルヴァトリー巨像復元図では、実際には十字架ではなく、長い棒状の上部にそれに類する装飾がついているように表現されるのが通例である。コインで一例を挙げると、315年打刻の銀貨表面の右、盾の上部に見えるのがその類いだが、そういったものを十字架に見立ててのプロパガンダがエウセビオス叙述だったと理解して、まずは大過ないと思われる。このようにエウセビオス叙述をすなおに読み込みさえすれば、もつれた糸が一挙にほどけ問題はきわめて単純となる点は強調しておきたい。



図版4 国立ミュンヘン貨幣博物館所蔵



Constantinopolis 記念貨幣 330-333年

ただここで、『教会史』叙述を真に受ける立場から、あえて1つの仮説を提示しておきたい。我々は現在目にする遺物の印象でどうしても往年を想像しがちだが、当たり前のことだが当時の実際の風景はまったく異なっていた。たとえば、凱旋通りの南端から北への見通しは、クラウ

ディウス水道橋が東西に跨がっていて遮られていた。そしてアーチ門屋上には、今は失われてしまった青銅製で金メッキの四頭立二輪戦車に搭乗するコ帝像があったはずで、それがエウセビオスを満足させる形で十字架に類するLabarum, Christogramm, またはキー・ロー（✠）本陣旗を奉じていた、と想定するならば問題はあつてなく氷解するはずだ。

第二の平行史料は、国原訳「神君アウグストゥス業績録」1, スエトニウス『ローマ皇帝伝』上, 岩波書店：紀元後14年ごろ）である。

[1] 私は19歳のとき、私独自の判断と私個人の負担で軍隊を調達し、これによって徒党の専制に圧迫されていた国家を自由へと解放した（rem publicam a dominatione factionis oppressam in libertatem vindicavi）。このために元老院は私に敬意を表して議決を行い、私を元老院身分に拔擢した。

カエサル暗殺後の混乱を、その遺産相続人オクタウィアヌスが收拾して権力を確保したことへの、アウグストゥス自身の表現である。マクセンティウスとコ帝の争いもローマ正規軍同士がぶつかった内戦だった。その意味ではオクタウィアヌスとアントニウスのそれと同様だった。よって文言もおのずと似通ったものになった。否、おそらくコ帝はアウグストゥスの権威を借りて自己権力奪取の正当性に説得力を持たそうと意図したに違いない。

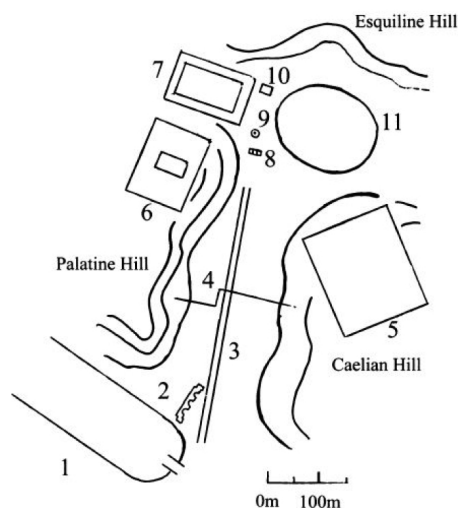
さて凱旋式は、大競技場を通過し今は消滅したセプティミウス・セウェルス帝203年創建の「七惑星堂」Septizodium を左手にみて大通りに進入するが、そこからが「凱旋通り」で、パラティヌス（パラティーノ）の丘とカエリウス（チェリオ）の丘の間の谷間を貫き、北をふさぐエスクィリヌス（エスクリーノ）の丘まで続く窪地を進む、当時の帝都において屈指の目抜き通りだった。そしてコ帝のアーチ門のすぐ北には、1世紀末以来高さ17mの円錐形の、方向転換の目印でかつ噴水も兼ねた「メタ・スーダンス」Meta Sudans（高さ9mに減じて1936年のムッソリーニ時代まで現存：図版7の解説のBachmann u. Müllerに写真あり）があつて、そこで左（西）に方向を転じると、パラティヌスの丘の北端の裾野の坂道から「聖道」Via Sacra が始まる。その坂を登り切ると第一次ユダヤ戦争勝利記念で82年創建の「ティトゥスの凱旋門」（欧文では単に「アーチ門」）をくぐり抜け、いよいよ凱旋行進はフォロ・ロマーノの窪地へと「聖道」を下って行って、中央広場に至り、祭典は最高潮を迎える。そして第6次パルティア戦争勝利記念で203年創建の「セプティミウス・セウェルスの凱旋門」（同上）を通過して、カピトリウム（カンピドリオ）の丘に登り、最終的にユピテル大神殿に詣で、連行した敵将を処刑して凱旋式の幕は閉じられる。

2. コ帝のアーチ門の建築意図：景観史学の有効性

さて本論に入り、Marlowe女史の新説（2006年）を紹介したい。彼女は、この「凱旋通り」から北方向を眺望する際、コ帝のアーチ門が312-315年に建設される以前からそこに存在し、しかし先行研究者たちがなぜか見落としてきた「ある」構造物の決定的意味に注目する。それですべての謎が霧散する、というのが彼女の主張である。

焦点は、これも碑文上で特定されていない「神格」が具体的に何を指していたかである。まず単数であることに注目するなら、多神教世界にあって、コ帝が自らの守護神として神々の中から選んで信奉していた「ある」神を指していた、と理解していい。先行研究でもこれが論争の的となってきた。この文言が、コ帝側の主導によって意図的に挿入されたとするなら、キリス

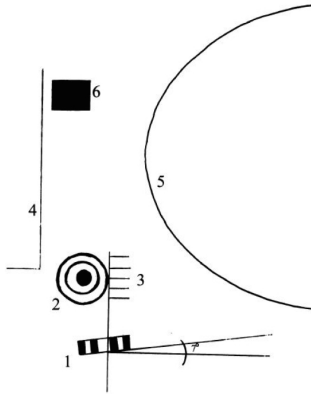
ト教の神を, 元老院勢力やローマ市民の反発を封じるために, 若干曖昧に表現したのであろう, 否むしろ元老院側が皇帝の意中を忖度してのことだったのでは, そうではなく皇帝にかくあれかしと誘導を意図してのことだったのでは, などと種々研究者たちの論議を呼んできた (10). それをMarlowe女史は単純明快に, コンスタンティヌス主導で, 「あの」神だったのだと断言する. 論より証拠, 女史提供の図版をご覧ください.



図版5 四世紀初頭の凱旋通り周辺の建造物の平面図

- 1 大競技場
- 2 七惑星堂
- 3 凱旋通り
- 4 クラウディウス水道渠
- 5 神帝クラウディウス神殿
- 6 不敗太陽神神殿
- 7 女神ウェヌスと女神ローマ神殿
- 8 コンスタンティヌスのアーチ門
- 9 メタ・スーダンス
- 10 太陽神の巨像
- 11 コロッセウム (フラウィウス円形闘技場)

多くを語る必要はないだろう. 凱旋通りの北端延長線上に8, 9, 10, すなわち「アーチ門」「メタ・スーダンス」, そしてあの「台座」が並んでいる. 種明かしをすれば, その台座上に, コ帝時代においてすら「太陽神の巨像」Colossus of Sol が鎮座ましましていたのだ.



図版6 コ帝のアーチ門周辺図：但し、番号は図版5にそって変更

3 ネロ時代の基盤目状舗床

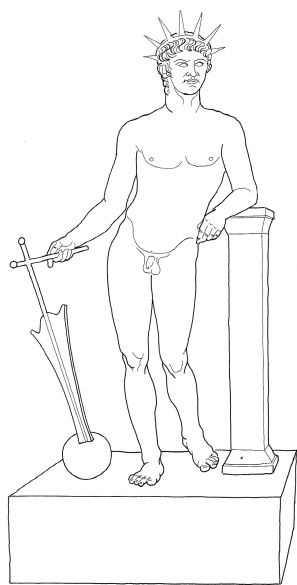
そして図版6であるが、女史によると凱旋通りの直進性はアーチ門で、7度ほど左（西）に傾いているそうで、その角度だとアーチ門中央通路の先の正面に、かの台座が視覚的に見通せるようになるらしい（メタ・スーダンスが、アーチ門左二本目の柱の陰にかくれる効果もあった）。そしてアーチ門から南に35mのところでアーチ門中央通路を通して太陽神像全体を見ることができた由。要するに、コ帝のアーチ門は、太陽神巨像を借景として意識的に設計されていた、というわけである。筆者もそれを追試してみようと、ウェブで入手したLancianiの平面図（1893-1901年：図版12参照）と、ローマ大学のパラティヌス丘北東発掘隊の平面図を組み合わせ角度を測定してみたところ、女史と同じ結果をえることができたことを付記しておこう。



図版7 19世紀末の写真



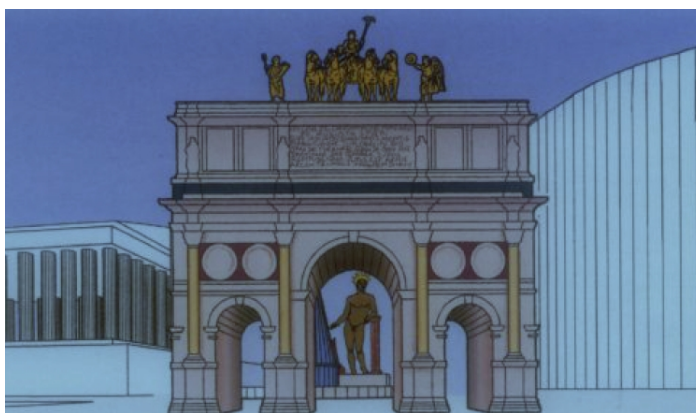
図版8 1933年以前の航空写真



図版9 ネロ巨像復元図



現在：中央通路の向こうの、樹木の場所が台座跡



図版10

こうして往時, 108mを隔ててコ帝のアーチ門と太陽神 Sol の巨像が一体化していたというわけである. さらに女史は畳みかける. のみならず, もうひとつ, 屋階の上にはこれも金色のコ帝が四頭立戦車を操っている青銅像が据え置かれていたが, 「凱旋通り」のクラウディウス水道橋 Aqua Claudia 付近から眺めたとき, その右横に重なるように太陽神の頭部が顔をみせる計算だそう. ちなみにアーチ門から270m.



図版10

アーチ門の施主なり設計者がその効果を最初から意図していたのは明らかで、こうして、アーチ門屋階の碑文中で言及されている「神格」なる文言の意味は、往時の人々にとっては「不敗太陽神」＝「ヘリオス神」以外に採りようもない事実だった、はずとなる。巨像が失われてしまった近現代の研究者の右往左往は、ひとえにコ帝の意図した都市景観のポイントを失念した、ないしポイントが失われてしまった結果だった。しかしながら、かの場所にかつて巨像があったことは研究者であれば周知の事実で、にもかかわらずアーチ門と連動して認識できなかったわけで、げに現状に引きずられた視野狭窄の思い込みはおそろしい (11)。

ところで、コ帝の太陽神信仰は、ある意味でアウグストゥスとネロに遡る伝統だった。彼らはアポロの保護下にある存在として表現されていたからである。それが三世紀になって諸皇帝は Sol Invictus, すなわち不敗太陽神としばしば結びつけられることになった。

かの巨像をめぐるのは、ネロ時代の約80ヘクタールの広大な「黄金宮」建設時にまで話がさかのぼる。帝都を灰燼に帰した64年の大火のあと、皇帝は帝都再建計画の一環として新宮殿建築を思い立つ。そして三つの丘に囲まれた窪地に巨大な人工池や牧草地まで配した宮殿が落成したが、その前庭に30mないし37mの偉容を誇っていたのが、ゼノドロス Zenodoros 作の青銅製の金メッキをほどこし、アポロ神を擬したネロ帝の巨大裸像だった（スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ネロ」31）。彼が68年に失脚するや、後続皇帝ウェスパシアヌスは、ユダヤ戦争捕虜、すなわちユダヤ人を投入して人工池の跡地に「円形闘技場」を建設した。そしてネロの巨像頭部は、ウェスパシアヌスによって太陽神 Colossus Solis に取り替えられた（スエトニウス「ウェスパシアヌス」18；大プリニウス『博物誌』XXXIV. 45；ディオンの『ローマ史』LXV. 15：ないしは頭部に太陽神の象徴である放射冠をかぶせられた）。そしてハドリアヌス帝は127/8年ごろ、かつての黄金宮の前庭に「ウェヌスとローマの神殿」建設を思い立ち（最終的な完成は141年。307年の火災で損傷を受け、マクセンティウスが修復）、巨像は建築家デクリアノス Decrianos によって上に持ち上げられ闘技場の北西に移動させられた。その移動時に象24頭が投入されたという（『ローマ皇帝群像』「ハドリアヌスの生涯」19）。コンモドゥス帝は、またもやその頭部を今度は自らに模したヘラクレス像にすげ替えたが、彼の死後元通りに戻された（『ローマ皇帝群像』「コンモドゥス・アントニヌスの生涯」17；ディオンの『ローマ史』LXXII. 22）。巨像はその後そのまま存在し（ヘロディアノス『ローマ人の歴史』I. 15. 9；Reg. IV），410年のローマ略奪時か、5世紀の二度の地震で崩壊し（442ないし443年/484ないし508年）(12)，溶解された。あるいは、尊者ベダが8世紀前半に述べている周知の言「コリセウス coliseus が存在する限り、ローマが存在する；コリセウスが倒れるとき、ローマも滅びる；ローマが滅びるとき、世界も滅びる」で、コリセウスと男性名詞を使用している事に注目するなら、そのころまで無傷であったとも考えられている（円形闘技場を指すな

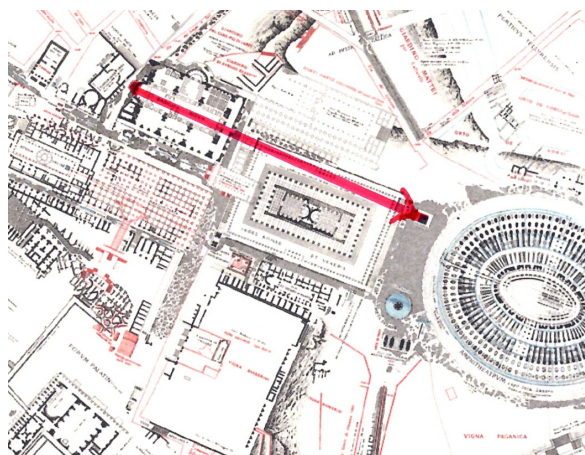
ら話は別だが）。なお、巨像をもって円形闘技場がコロッセウムと呼ばれるようになったとは、人口に膾炙した説であるが、巨大建築物そのものがその名称にふさわしいとするのが自然だろう(13)。

なお、巨像倒壊と溶解後もハドリアヌスによって建てられた台座部分はずっと残存していたが、1936年にムッソリーニによって、すでに表面に貼られていた大理石が剥がされ煉瓦が露頭してコンクリート遺物と化していた台座は、最終的に除去された。しかし、1983年の発掘をもとに方形区画で再建されたものを今日みることができる(14)。

3. 新バシリカのコ帝巨像凝視の先

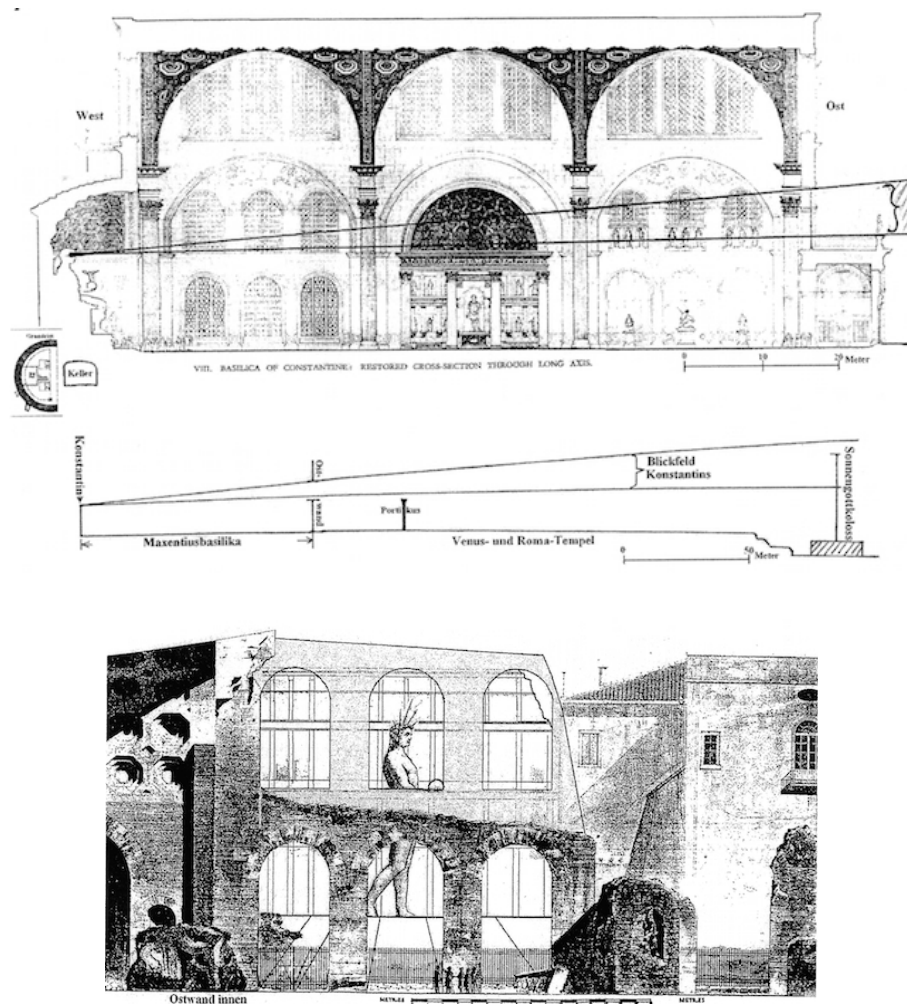


さて前述のように、コンセルヴァトリー宮殿中庭のかの諸断片の、もともとの巨像は新バシリカの西アプシスにあった。そもそもマクセンティウス帝の当初計画では、アプシスは北側に予定されていた。それをコ帝が西側にも作らせてそこに自らの巨像を設置したという経緯がある（主要玄関もそれに合わせて、東側から南側に変更された）。この変更が意味していることに最初に気づかせてくれたのは、Safran 論文(2006年)である(15)。彼女に習って、Lancianiの平面図を使って、新バシリカの西アプシスから東端の出入口を結び、それをさらに東に延長してみると・・・、これまで誰も気づかなかった意外な事実に驚くことになる。そう、巨像台座に行き当たるのだ。



図版12 新バシリカからのコ帝の凝視の先

それをさらに立体的に検証し、アーチ門及び新バシリカと台座の両方の関係に言及したのが、Löhr(2007年)である。彼は、新たに新バシリカ内のコ帝のやや上向きの凝視の角度を測定し、それが新バシリカ東端上部の窓枠のかなたにまさしく巨像立像の上半身を捉えていたと指摘する。これは新バシリカの床上で身長2m未満の人間の目線では求めがたい視野で、あくまで台座8m、座像高15mのコ帝の目線でこそ初めて見ることのできる風景であった、のだが。



図版13 コ帝巨像の目線で見える太陽神像

要するに、新バシリカとそこに設置されたコ帝の巨像は、それ自体が見る者を十二分に驚嘆・畏怖させると同時に、ハドリアヌス帝以降の巨像、すなわち不敗太陽神を組み込んで意識的に建築・製作されていたことが明らかとなるわけである。

こうして、帝都ローマの中心区画、凱旋通りとフォロ・ロマーノを舞台として、コ帝は一方ではアーチ門を通して、他方では新バシリカの高窓越しに、太陽神の巨像を注視するという景観を意図的に構築していたことが明らかとなった。換言するなら、一見ニュートラルな二大公共記念建造物を利用して、帝国盛期を生き延びて今や不敗太陽神となった巨像を中心軸にして、

これまた巨大な統治者像の燃えるような凝視で、彼の支配理念を万人に理解可能な視覚を通じ、元老院を含む被支配層に威圧的かつ効果的に示唆していたのである。

【図版】 本稿中、特記なき図版画像は著者撮影ないし所蔵

1 B.Chr.Doherty, *Space,Ritual,Event:Constantine's Jubilee of 326 and its Implications On Urban Space*,Master's Thesis,University of Tennessee,2013, Fig.3.3;4.1.

2 http://www.arctron.de/uploads/media/Constantine_CaseStudy.pdf#search=%27The+Constantine+Project%27

3 Johannes G.Deckers,Der Koloss des Konstantin,in:Hrsg.von L.Giuliani, *Meisterwerke der Antiken Kunst*,München,2005,168.

4 http://www.staatliche-muenzsammlung.de/highlights_06.html

5,6 E.Marlowe,Framing the Sun:The Arch of Constantine and the Roman Cityscape,in:*Art Bulletin*,88-2,2006,223-242,esp.,224,fig.1,2.

7 この写真は,G.Calcagni,I Tondi adrianei de l'arco di Costantino,in:*Rivista dell'Istituto nazionale d'archeologia e storia dell'arte*,N.S.19/20,1996/7,177,fig.2 からの部分拡大図.撮影年代は不明だが,おそらく 1890-95 年頃と思われる (cf.,Redazione von D. Bachmann u. D. Müller, *A Trecentosessanta Gradi:39 Variazioni sull'Arco di Costantino,1849-1910*,Istituto Svizzero di Roma, 2002, 40) .手前の柵はメタ・スーダンス用,その向こうの台形状隆起がハドリアヌス時代の巨像台座遺物.

8 1933年以前との日付で掲載 (M.Bergmann,Der Koloß Neros,die Domus Aurea und der Mentalitätswandel im Rom der frühen Kaiserzeit,in: Sonderdruck aus *13.Trierer Winckelmannsprogramm 1993*,Mainz,1994, Tafel 1) .左下隅にアーチ門とメタ・スダーンス,そして中央部に方形の台座が確認できる.

9 Bergmann,Abb.10. 20 世紀を代表する修復士 Silvano Bertolin による.

10,11 Marlowe, fig.16,13.

12 R.Lanciani, *Forma Urbis Romae*,Milano,1893-1901,pl.29(<http://www3.iath.virginia.Edu/waters/forma/forma29.html>).

13 W.Löhr, Konstantin und Sol Invictus in Rom,in:*Jahrbuch für Antike und Christentum*,50, 2007,102-110,Abb.3,4a. 背景の図版,どこかで見た画像と思っていたら以下を使っていた.A.Minoprio, A Restoration of the Basilica of Constantine,Rome, in:*The Papers of The British School at Rome*,12,1932,1-25, Plate II,VIII.

【註記】

1 Bergmann,1997 年 ; Marlowe,2006 年 ; そして Löhr,2007 年.

2 Safran,2006年 ; Löhr,2007年.

3 パノラマ画像は以下 5 場面続く : <https://www.google.com/maps/views/u/0/view/116405375277701596294/gphoto/6084943903124750242?gl=us&hl=ja&heading=65&pitch=90&fov=y=75>)

4 <http://andreimihailiuk.wix.com/romantriumph#!sources/c1mh4> ; 毛利晶「絢爛たるローマの凱旋式」吉村忠典編『ローマ人の戦争』講談社,1985年,269-307頁 ; 同「凱旋式と古代ロー

マの王権」水林彪他編『王権のコスモロジー』弘文堂,1998年,282-307頁.紀元前1世紀の順路は以下参照.D.Favro,The Street Triumphant, in:Ed.by Z.Çelik,et others,*Streets: Critical Perspectives on Public Space*,University of California Press, 1994,Fig. 1,7 ; M.Beard, *The Roman Triumph*,The Belknap Press of Harvard UP.,2007,151.

5 H.P.L'Orange/A.von Gerkan, *Der spätantike Bildschmuck de Konstantinsbogens*, in: *Studien zur Spätantiken Kunstgeschichte*,10,Berlin,1939/1978,178. コ帝肖像の貨幣上での光輪 nimbus 登場も,315 年以降の由.Idem,177ff., Münztaf.II nr.14 : レリーフが本来の順序と異なって詰め込まれたものそのためか.

6 「コンスタンティヌス大帝の“改宗”年代」,「ローマ中央広場のコンスタンティヌス像とその碑銘」*STUDIA CLASSICA*,1,2010,1-54 頁 ; 175-204 頁.

7 C.P.Presicce,Konstantin als Iuppiter,in:Hrsg.von A.Demandt u.J. Engemann, *Imperator Caesar Flavius Constantinus:Konstantin der Grosse.Ausstellungskatalog*,Luxemburg u. Großregion,2007,CXXXI;Deckers,168.

8 管見の限りその最初の指摘は,H.P.L'Orange, *Das Spätantike Herrscherbild*,Berlin,1984, Tafel.50-51.

9 P.Pensabene,L.Lazzarini,B.Turi, New Archaeometric Investigations on the Fragments of the Colossal Stature of Constantine,in:*ASMOSIA*,5,2002,250- 255.

10 弓削達の『一橋論叢』での一連の論考参照.28-4,1952,68-98 頁 ; 41-5,42-2,1959, 41-57 頁,58-74 頁 ; 42-2,1960,1-20 頁.とりわけ,最後が氏の到達点を述べている印象がある.但し,主導したのがコ帝か元老院かなど論じるまでもない.逆賊マクセンティウスに荷担した元老院は唯々諾々とコ帝の要求に従う以外なかったのだから.

11 種々試みられている再現映像の一例を紹介しておこう.Nerone e la Domus Aurea:An Altair4 Multimedia Production,2011 ; Rome Reborn 2.2:A Tour of Ancient Rome in 320CE (<https://vimeo.com/32038695>) .

12 島田誠『コロッセウムからよむローマ帝国』講談社選書メチエ,1999,14 頁.

13 以下参照.青柳正規『古代都市ローマ』中央公論美術出版,1990,317-9 頁 : 島田 (前掲書,7 頁) は円形闘技場と巨像の折衷説をとるが,ベード引用箇所 (14-15 頁) ではコロッセウムを採用.

14 http://penelope.uchicago.edu/Thayer/E/Gazetteer/Places/Europe/Italy/Lazio/Roma/Rome/_Texts/PLATOP*/Colossus_Neronis.html : 巨像の足から内部に入るトラヴァーチン製階段の遺物の写真に注目.

15 L.Safran, What Constantine Saw. Reflections on the Capitoline Colossus, Visuality, and Early Christian Studies, in:Hrsg.von W.Brandes et als., *Millennium 3/2006*,Berlin/New York, 2006, 43-61.

【本稿は、文科省科研基盤研究B : 研究代表者・豊田浩志「コンスタンティヌス大帝研究 : 1700周年記念における新展開」 (平成25~27年度) の研究成果の一端である】